

想い、思うこと

熊田 熊三郎

一九九五年頃、センター関係の全国的会誌に次のような投稿をしたことがあります。

「オウム事件で、実行者達は、所謂有名な大学や大学院を出ていて幼い頃から英才などと言われてきました。インターネットで論理的合理的な判断が出来る人であると自らも他人も認めていたでしょう。その人たちが、人が殺傷されるのを予想される毒ガスを製造使用したのですから、とても理解出来ないと思う人がいます。教団に背くのは悪業だとマインドコントロールされたのだと言われています。

『わだつみ』の学徒兵（死ななかつたので記録されなかつた者を含めて）、同世代の三%の超高学歴者達が、戦場で殺戮や掠奪を行い瓦斯弾で砲撃したり、また体当たりの特攻隊に参加しました。理解できないと言う人がいます。皇国と国民を守るのが義務だと教育されてきた結果だと言われています。

『回顧録 幾山河』で、戦後新興商社の重役になった嘗ての中堅参謀が、太平洋戦争の必然性と作戦の齟齬とを回想しています。

初級将校として参戦した閣僚経験者は、慰安婦は商行為であると主張しています。

戦争遂行は統帥権の執行で戦費は国会の決議で支出している、遊郭は公認企業だったから、戦争も慰安所も『合法』であったとの認識のようです。

最近、戦前の貴族院の秘密議事録が公開され、日支事変前夜のことが広く明らかになりました。衆議院で斉藤隆夫が例の肅軍演説の故に議員を除名されたとあります。斉藤代議士の主張の可否は兎も角、対立する意見を抹殺するのとで議会が機能を失い軍部の暴走を許すと危惧した議員はいなかつたのか。議員と言えば、知的に優れ豊富な経験を有する当時では国民のエリートであつたはずです。民主思想が未熟だつたからと言う人がいます。これらのことに、教育がどう関わってきたのか考え込んでいます。」

兵役六年余、前戦で左腕上膊を切断、工業技術から教職へ、教師になつてからは組合専従役員・理数系高校課程実験計画・教科研究会主務者・教頭・校長・教育センター所長等々を勤め公務員を退職しました。

退職後は、学校法人役員・調停委員・証券会社非常勤相談役・社会保険労務士・同窓会（大学）支部事務局・地域自治会役員などを経験しました。

冒頭に掲げた文に流れる「思い」は、教師を希つたときからその後の職務中ずっと続いておりました。教師の為の教育を特に授けられたでもなく、教育する為の研修や学習は非力ながら努めてはきましたが、「思う」と忸怩たるものがあります。

しかし、更に今まで思い続けてきていると、自分なりに納得できたと思ひ返しております。

（昭和五十一年四月～五十四年三月 所長）

福沢諭吉と理科教育

石原 太紀

まえがき

センター勤務から約二〇年経っています。原稿依頼を受けたものの、思い出は断片の連続です。幸いといふべきか、少々残っていた当時の草稿の中から一点拾い出したものを以て埋草とさせていただきます。

小学校理科担当教員研修会の講話より

古い話で恐縮ですが、福沢諭吉と理科教育ということ、少々お話させていただきます。福沢が若い頃に物理化学に非常に興味を抱き、その進歩の将来に無限の明るい希望を寄せていたことを、私はつい最近になって知ったのであります。なぜ物理の著書をあらわすほど関心を持ったかという、それには彼の一〇代の頃の手工労働の体験が、大いに関わっていたようです。

福沢は豊前中津藩（今の大分県）の下級武士の家に生まれました。当時そうした階級では内職に手工業をやるのが普通で、諭吉も元来そういう仕事が好きで、進んでやっただけです。仕事の種類は、いかけ、刀剣の細工、下駄の歯入れ、桶のタガの取り換えなど、なかなか技術のいる仕事

で、専門の職人について習いおぼえて、そのレベルは本格的なものだったそうです。

若い頃、そうした手細工の技を学んで、金銀銅鉄などの性質を知ったのは、「生涯の一大所得であった」と、後になつて述懐しているであります。即ち、言うところは、自然の物質や力は、説教や呪文で動かすわけにはいかない。これを扱うには、必ず法則に頼らなければならないことを習い知ったのであります。彼が物理化学の法則の精妙さに触れて感じとった驚きや喜びは、その後の人間的成長に大きな糧となったであります。

本日の研究テーマと青年諭吉像とを重ねて、講話とさせていただきます。

昭和六三年一月三一日

あとがき

所長に就任した年から、講座の初めの「挨拶」は「講話」と改められた。各講座の内容に合わせた講話を考えるのに苦勞したことを思い出します。

我が国現代教育の一番の祖は、福沢諭吉であろうと私は思い、「学問のすすめ」「福翁百話」などを読みなおしていたようで、この講座の挨拶にもそれが現われています。

（昭和六二年四月〜平成元年三月 所長）

思い出すこと

高橋 伸郎

教育センターには、専門研修主事として四年、所長として二年の二度勤めさせていただいた。

前後六年間の勤務中の思い出はいろいろあるが、今も心に残っていることは、専門研修主事時代の「六年目研修」の実施の最初に遭遇したと、所長時代に『岐阜県教育センター施設機能に関する調査研究報告書』を、所員全員で作成したことである。

教職に携わる者としては、児童・生徒の指導育成に当たっての日頃の絶えざる研鑽は当然のことであるが、任用後六年を経過した教員を対象に、それを制度的・組織的に行うとしたのが、いわゆる「六年目研修」であった。このことにかかわって、次のような出来事があった。

第二研修部は中学校の研修を担当したが、講座開講式の冒頭に、一人の男性教員が発言を求め、「私は共稼ぎで、子どもを幼稚園に送っていかなければならない事情にある。そのために今日は遅刻をした。ところが受付で注意を受けた。まことに理不尽である。」という意味のことを言った。

当時ある方面では、六年目研修は官制研修であり、研修は自主的に行うもので強制されるものではない、といった考えがあった。その立場からいえば、この形態の研修は唾棄すべきものであったのだろうが、こうした発言を堂々とできる教員に教えられる子どもたちはどんな人間に育っていくのだろうか、と思ったことであった。

後者の『調査研究報告書』というのは、退職までの期間を三つに分けての教員の研修体系の整備と、それに伴う講座の改革等を効果的にするために、教育センターの施設設備を新しくするという内容を盛った青写真であった。

それ以前にも、教育センターの改修計画が立案されたことがあったそうだが、どういうわけか「お蔵入り」となった経緯があった。そのことを薄々知っていただけに、当時の所員たちは、この青写真の作成に、時には夜遅くまで、侃々諤々、論議を交わしながら没頭してくれた。設置場所も、現在の場所ではとても手狭であり、かつ、県内各地から研修に参加される先生方の便宜等を勘案して、当時整備されつつあった東海北陸道の関インターチェンジ付近をということまで考えていたのであった。

研修と研究の殿堂の設立ということで、所員一同その計画に熱意を燃やしたのであったが、結局はこれも「お蔵入り」となってしまう。しかし今でも、あの時所員の示してくれた熱意には頭の下がる思いを持っている。

ともあれ、私は、教育センターで多くの方との出会いを持った。どの方も、すぐれた力と人間性を持った人たちであった。今では鬼籍に入っておられる方もあるが、あの人の方、お一人お一人の顔がお声がお顔が、鮮明に浮かんでくる。私の三七年間の教員生活の中でも教育センターでの六年間は、教えられることのととても多かつた年月であったと、今でも感謝している。

(昭和五二年四月～五六年三月 第二研修部専門研修主事)
(平成元年四月～三年三月 所長)

教育センター断想

鳥居 甚吾

私たち世代の教諭時代には、まだ教員研修の機会や場所は、なきに等しかったので、現在のセンターの建物で私は研修した記憶がない。

しかし、昭和五四年、旧学校指導課に勤務するようになってから、退職するまで、「教育のメツカ」として、センターには実に多く訪れ、利用し、お世話になった。

私のセンター在勤は、わずか一年であったが、本当に楽しく過ごすことができた。

小中高・特殊教育・教育相談などの優秀な先生揃いで、人間関係も良好で、研修には、最良の場所であった。

当時、ご一緒した先生方が、後年、県内の教育界でそれぞれ大活躍されているのを知ると嬉しい。また、県内一円から長短の研修に来所される先生方に久しぶりにお会いできるのも嬉しかった。その他、AETや当時、ホンジュラス国から二人の海外研修の先生を迎えており、国際交流も可能であった。

いま思うと、私の教職生活のうちで、教育行政機関や学校現場と違って、最も静かで、落ち着いていた生活の一年ではなかったか。

私自身浅学非才のため、所長として身の引き締まる思いで、自分を磨く絶好のチャンスと考えた。

私の担当は、新任校長及び教頭の研修講座の他に、すべての講座の開講式の頭に、所長講話が位置付けられていた。回数が多いだけに大変であった。いつも同じ話題では、あ

りきたりになるし、忸怩たる思いであったので、各講座毎に話題を変えるように心掛けた。そのため、当該講座に関連した本や雑誌、新聞記事を読み、また、多くの人の話を聴くように努めた。読書は、元々好きであったが、この時は必要に迫られて、生涯のうちで最も多く本や雑誌を読んだのではないか。

次に、話題は全く別であるが、センター内の各所に絵画・書・彫刻が展示されている。しかし、いつ見ても同じ展示。また、どんな経緯で展示されているのか判らない。

そこで、センター内に、まだ展示可能な壁面がある。研修の合間に目を休めたり、来所者にも観覧していただくため、県内教員の作品展示を協力してはどうか。更に、可能ならば展示替えをしてはどうかと私は考えた。

そんな考えを、元教員及び現職の教員で作家活動をしている方に、人を介してお願したところ、早速、次の六名から心よく賛同して無償で寄贈していただき、いたく感謝した。

- (一) 座馬井邨先生 『万葉歌・あおによし』
 - (二) 関谷義道先生 『心』他三点
 - (三) 山田輝夫先生 『昭和新山』
 - (四) 長谷川忠廣先生 『囲炉裏のある風景』
 - (五) 堀江良一先生 『孤のある風景』
 - (六) 久保田正剛先生 『SPACE, GOLF』
- わずか一年の収集であったが、思い出の一つとして、ここに書き留めておく。

(平成三年四月～四年三月 所長)

教育受難の時代

水野 智雄

公立を定年退職してから一二年間、帝京大学可児高等学校に勤務したので、退職後の生活は五年目を迎えた。今は、五反余りの田畑を耕している。一日の労働を終えると食卓に向かってチビチビと晩酌を始める。下校後、外で遊び回っていた孫共が、五時のチャイムを合図に帰ってくる。そして、その食卓で勉強を始める。これが、いつの間にか我が家の日課となり、私の楽しみともなった。

この勉強に最近、変化を感じている。少し前までは、持ち寄る教材は公文の教材であった。が、今年は違う。年少組の幼稚園児以外は、小二の孫も小四の孫も、漢字や計算のドリルを持ってきている。学校の宿題である。先日などは、小四の孫が日本地図を広げ、全国の県名を書き出して暗記していた。「宿題か？」と聞くと「テストがあるから自分勉強」とのこと。かつて「ゆとり教育」の教科書を調べていたある社会科の先生が「義務教育の教科書に、ほんのわずかしが県名が出てこない」と嘆いていたことを思い出し、教育現場の変化を、一層、感じた次第である。先日のテレビ報道にも「東京都のある区で土曜授業が始まった」と言うのがあった。やっと教育の現場で「ゆとり教育」が

見直されて来たらしい。

私が教育センターに勤務したのは平成四年。日本が経済大国を誇り、バブルに酔った直後であった。このため、経済的な混乱だけでなく教育界にも様々な余波が押し寄せていた。あるけしからん教師の行動をきっかけに、マスコミの取材攻勢が激しくなり、副教材の問題とか体罰のあり方など、その対応に教育界が翻弄された。社会教育も家庭教育もままならない中で、唯一、残っていた学校の教育力も大きく揺らぐこととなったのである。一方、この時期、バブル弾けたりと言えども経済大国に急成長した日本に世界からの「日本バッシング」は熾烈を極める。日本の教育力を削ぐため「日本人は働き過ぎだ」とクレームが付く。こんなのはそのほんの一端であった。「詰め込み主義反対」「個性重視」「ゆとりある教育」等々、自称教育学者たちの大合唱が続く。政府もビジョン無く「ゆとりある学校教育」を提唱し、「学校週五日制」の完全実施へ向けて詰め段階に進んでいた。こういう時代であった。

それから十余年。今や日本企業は人材を国外に求めるまてになつてしまった。子守を預かるジジババは、連休続きで疲れ果てている。教育は国家百年の計、しっかりした政策を、心より望む次第である。

(平成四年四月～五年三月 所長)

所長の思いあれこれ

林 茂則

教育センターには一年間という短い勤務で、確たる業績をあげることではできなかったが、当時の日誌に記された幾つかの思いを、今後の参考になればと願って紹介する。

愛され、頼りにされる教育センターの創造

教育センターの大きな働きは教員の研修である。教員は研修の重要性をそれなりに認識しているが、現実には避けて通るか、先送りする状況がみられた。私が所長として最初に考えたことは表題のとおりで、具体的には、「花やかオフィス・さわやかマナー」を提唱した。前者については、花飾りの活動を進めた。花は人の微笑みに似ているといわれるが、花のセラピイを活用することを考えた。併せて全職員が一人一鉢のキク作りを実践した。はじめは物珍しさもあって積極的な取り組みがみられた。しかし、休日の水やりなど、面倒をみることにかなりのストレスを感じたようである。秋になって大輪の花が咲き、玄関や研究室に飾られると、受講生を迎える職員の気持ちに変化が見られた。さわやかマナーについてはオアシス運動の展開を呼び掛けた。この活動によって、私たちが生活し、成長する場の慣習を幾分でも変えることができた。言葉や個人的変化だけを追求しても、限られた成果しか得られない、こうした小さな実践こそ大切である。

主体的に解決しようとする能力の育成

赴任早々の五月一〇日に全理セ（岐阜県大会）総会が開催され、先送りされていた初等理科出版物の刊行の決断を迫られた。私は第三研修部の熱意と実力を信じてその責任を引き受け、この時の願いを「この本は、児童が具体的な自然の事物・現象から問題を見つけ、これを主体的に解決しようとする能力を目指して、各研究校の協力を得ながら研究開発し、蓄積してきた指導資料を精選してまとめたものです。内容の一つ一つに児童の問題解決能力や自然を愛する心情を育てる意気込みと内容を支えるたゆまぬ教材研究への熱意が滲んでおり、活用に当たってはこれを忘れてはならないと思います」と巻頭言に書いた。今でも実践実習こそが問題解決能力を育成できる指導法だと確信している。

教えることは学ぶこと

ある職員と出張をしたとき、列車の中で「所長の講話を聴いていつも感心しています。どのように準備されていますか。」と問われた。そのとき、なぜか、真の学びにはこの謙虚さが大切だと、私自身が教えられた。それ以来、人間は学ぶ力を与っており、その活用に努めて技を身につけることも重要だが、センター職員には学ぶことよってのみ必然的に備わってくる謙虚さを身につけることが最も必要だと考えるようになった。

（平成五年四月～六年三月 所長）

教育センターの思い出

山口 英和

さわやかな教育センター

昭和六二年四月、第一回所員会で新任者を代表して石原太紀所長が挨拶された。

「このさわやかなセンターに就任して・・・。」という冒頭の言葉を今も記憶している。

教職員課にて長い間、激務を体験された石原所長のほつと一息の感想であったのか。

センターの職務は、各部の研究と講座の開催である。相談部だけは、通常午後に教育相談を実施していた。

今は亡き田口亥利先生のご指導のもと、ロジャーズの「来談者中心療法」の習得に励んだものである。どうもロジャーズの文章は読み辛いと感じていた。文章が長いのである。

後になって、ある書物の一節に「ロジャーズの理論は他の学者によって巧にまとめられて確かに伝承されていった。」と解説されていたのである。「それもそうだ」と納得したほどである。それ以後、ロジャーズ理論については紹介本も参考にしていた。

私の専門は心理学である。卒業論文の指導教官が主任であったので、極めて多忙という理由で加納小学校の宮脇修教諭を紹介された。この出会いが私の人生を決定していくのである。先生に憧れ、尊敬し、心理学を大切にして、教育実践も大事にしていくよう心掛けた積りである。

後に、附属小学校にて宮脇先生と一緒に仕事ができる幸運に恵まれたのである。そこで自閉症児の治療的指導に取り組み、その事例研究を学会で継続的に発表していった。共同発表をしたこともあった。

宮脇先生から受けた感化は強く、今でも深く感謝しているところである。

宮脇先生は、毎日、書籍を食べるが如く読んでおられるお方。八一才になられても。

一方、私は六八才で右眼網膜に微少な穴が開き、細かい文字は読み辛い。左眼が疲れるから。現在、全く本は読んでいない。一生懸命頑張っていることはカラオケだけ。

心理学がもたらした成果

附属小学校へ副校長として戻り、臨床心理士の資格申請をした。合格の通知を受け取った時はとても嬉しかった。退職一年前のことである。

合格決定の決め手となったのは、心理学の単位は勿論のこと学会発表論文五編、臨床経験五年以上の資格規定。センターへ計三度赴任したことが幸いしたのである。

県教育委員会に感謝、感謝である。

(昭和五五年四月～五七年三月 相談部専門研修主事)

(昭和六二年四月～平成二年一月 特殊教育部課長補佐)

(平成五年四月～六年三月 次長兼特殊教育部長)

思い出すこと、あれこれ

溝下 和子

教育センターには発足当時と、平成六年四月からと二回お世話になりました。

平成七年度から学校週五日制が段階的に実施される直前でした。学校・家庭・地域社会の連携や、子ども一人一人のよさや可能性を伸ばす教育が重要視されるようになっていきました。その具体策に取り組むため、教育センターの研修の改善充実が求められました。中でも教育相談は、顕在化している不適応行動への治療的な面から、一人一人の子どもに対する指導・援助、すなわち各教科指導の中での教育相談的な配慮の重要性が強調されました。その実際について研修し、日々の教科指導に生かせるよう、年三回の教育相談に関する重点講話を実施することとしました。一回に一〇から一四の講座を同日開催し、午前中に外部講師による講話を位置づける形で実施しました。

講師の一人を当時筑波大学教授の国分康孝先生にお願いしました。学校指導課の瀧本課長さんにアポをとっていた後、直接お願いするため上京しました。先生は時間にとっても厳しい方だと側聞していましたが、約束の時間に遅れないよう、さりとて早すぎないよう、研究室の前に立ちました。ちょうど先生が一〇メートル程向こうの廊下を近づいて来られました。早速研究室に案内され、講話を快くお引き受けいただきました。

講話開催当日は演習を取り入れながら、「カウンセセリン

グは特別の人にしかできないというものではない」など、カウンセセリング・マインドの本質的部分を分かりやすく指導してくださいました。そして授業が分からないのはコミュニケーションがうまくいっていないからで、すべての教師に子どもとの間のリレーションを高める技能が必要だと強調されました。受講者からは、カウンセセリングは日常生活の中でできることである、心を開いて自分の思いをぶつけたいなどの感想が多く寄せられました。

また、教育センターでの仕事の一つに、夏季特別講座の講師の依頼がありました。ノーベル文学賞受賞後の大江健三郎氏は「これまでにお引き受けしているものに限らせていただきます」。宇宙開発センターに毛利衛氏をお願いしたところ、「岐阜県にはすでに派遣したので」。NHKに国谷裕子キャスターをお願いすると「年度末に異動があるかもしれないので」。漫画家の松本零士氏は「夜中に仕事をし、午前中は就寝しています」。などの回答で、断念せざるを得ませんでした。共立女子大学教授でエッセイストの木村治美氏にお引き受けいただき安堵しました。

折から、国庫負担の人件費に対して、会計検査院の検査があり、その対応に苦慮しました。それが、その後の教育委員会の組織改編の要因の一つになったと思っています。

思い出は尽きませんが、在任中非力な私を支えていただいた所員の方々に心から感謝いたします。

(昭和四五年四月～四八年三月 第二研修部研修主事)

(昭和四八年四月～五二年三月 第二研修部専門研修主事)

(平成六年四月～八年三月 所長)

初の女性所長の誕生と人間力

奥村 怜

溝下和子所長を迎えて、何度も所長講話を聞き「愛され、頼りにされる教育センター」を意識して当時の日誌に綴った文を紹介し、運営の姿を汲みとっていただければ幸いです。

教育センターは今までと変わったという声を求めた。女性らしさが、すべての運営にみなぎっていることだ。私は女性といえ、母親を思う。母親はいつでも私を見守っていた。いざという時には、真剣に聞いてくれた。(聴いた)所員も聴く人になろう。そのためには、受講者から離れないことだ。「なんででしょうか。」と問いかける心をもとう。こんな言葉一つで、受講者は安心して学ぶであろう。

「礼儀と規律のある教育センター」を求めて綴った文は愛情と厳しさを求めているように思う。

電話の応対には明るさとやさしさを。挨拶は人より先に自らを。「ありがとう」という一語がほっとする。「花のある便所」は気持ちよい。常に続けよう。奉仕の心を忘れずに。何でも言える時でも何を言ってもよいことにはならない。常に場と人を意識して臨もう。

所員の研修については、法に則って語る所員でなくてはならないことを常に語られた。

専門職としての内容の深さは当然のことであるが、「学ぶ」は誰からでも「学ぶ」姿勢をもって欲しい。諺に「名將は部下から学ぶ」と言われたように、教師は「子どもから学ぶ」という構えを肝に命じて訴えを続けていきたいものだ。

私は、所長さんの思いを押し量り、次長の立場から所員に訴えた。その結果、「わがままな次長」と言われたけれど、屈することなく突進した。

特に思い出すことは、まず、ワープロからパソコンの導入が進み、年度途中からでも実施してほしい旨が舞い込んだ時、「講座を途中から変更しない」との方針で、防波堤となったことである。しかし、その後、パソコンは誰もが簡単に操作できるようになったことは、パソコン講座を展開された効果であろう。

確かに流行としての講座も必要であろうが、流行に流されてはいけない。常に不易な教科(道徳・特別活動も含む)講座と流行としての講座が調和していくことがセンター講座の重要な役割ではないかと思っている。

また、理科教育に生活科が統合されたことである。所員の減員により、生活科がその対象となり、仲間の雰囲気は乱れたことも辛いことであった。さらに道徳教育・特別活

動は、生徒指導講座の充実でますます圧縮されようとした時、県の方針と重点を持ち出して抵抗したことも忘れられない一コマである。

こうした数々の諸問題に対して、次長としての役職を無事に果たすことができたのは、的確な指導をして下さった所長さんのおかげであり、先生の偉大さには敬服するばかりである。

（昭和五九年四月～六〇年六月 第一研修部専門研修主事）

（平成六年四月～八年三月 次長兼特殊教育部長）



現在の総合教育センター（平成 22 年 9 月撮影）

思い出あれこれ

各務 齊

一 はじめに

私が赴任した年の七月に第一五期中央教育審議会の第一次答申があり、「生きる力」と「ゆとり」がキーワードとして大きくクローズアップされました。

こうした中、従来の一般研究六分野に加え、新たに「地域教育」の分野を興し、「学校・家庭・地域社会の連携の在り方」をテーマとして、いじめや不登校の問題に係わるプロジェクト研究をスタートさせました。

前任者に感謝しつつ、所員のやる気に胸が熱くなり、私も「やるぞ！」と所員共々燃えた若きあの頃を思い出す今日この頃です。

二 教育センターの地位について

当時、当センターは教育委員会の出先機関の一つでしたので、所長は教育委員会の幹部ではなく、教育委員会の幹部会議等の重要会議にはメンバーとしては出席できませんでした。

当センターは学校等の現場等と連携をとりながら、岐阜県の教育を推進していく最も重要な機関であるとの認識でしたので、何か吹っ切れない気持ちがありました。今では改善され喜ばしい限りです。

三 最初の携帯（電話）

携帯は今や、小学生、否、幼稚園児でも持っている時代

になり、電話機能のみならず多機能化し、日進月歩に進化している今日この頃です。

私が当センターへ赴任する前の学校では、一人の職員のみが古い大きな携帯を持っており、相当高価な物と聞いておりました。

赴任したばかりのある日の夜、小型の携帯で話をしている職員がいましたが、その時は「お金持ちもいるもんだな」とあまり気にもしませんでした。

ところが、その後も夜になるとあちらこちらで前述の風景が見うけられ、「所長の私でさえ持っていないのに・・・」と不思議に思っただけで済んでみると、「夜間は電話交換手がいけないので、こちらからの電話は繋がるが、相手からの電話は（携帯が無いと）受けられない」とのことでした。そして、「今なら千円で買えますよ。買ってきましょうか」と言われ、即座にお願いしました。

四 夢の車

バブル経済がはじけて岐阜県も緊縮財政になり、当センターは公用車は有るものの運転手が配置されなくなりました。所長の出張時は庶務係（長）が運転してくれる事になっていきましたが、彼らも毎日多忙で、運転して貰うと勤務に差し支えるので、何処へ行くにも私自身が公用車を運転して出かけることにしました。

当時私も、「何時かはクラウン」と思っていましたので、クラウンを運転しての出張は「るんるん気分」でした。當時はおおらかな古き良き所長時代でした。

（平成八年四月～九年三月 所長）

教育の殿堂

江端 雅司

当教育センターは、「教育の殿堂」として相応しい機能を有していた。

一つは、服部所長がトップとしてのリーダー性を発揮され、「改革は、苦労や工夫が伴うもの」と言って、所員を引っ張ってこられた。未来を見据えた透徹したビジョンで改革されたこと。

二つめは、一研・二研・三研、相談部が一丸となってその職務を全うし、教育センターの本来の使命である「教育職員の研修及び技術的指導」が徹底して行われていたこと。

三つめは、各教育事務所の分掌事務に「指導及び助言」はあっても、「調査研究」の事項はなかった。これが、教育センターの最たるものとして私は捉えていた。教育センターの建物は『白亜の殿堂』ではなかったが、県内の教育職員に、意識改革と実質的な指導力の向上に多大な影響力を与え、教育の殿堂として燦然と輝いていたこと。

以下、二、三の出会いについて述べる。

○平成一〇年度は重点講話や講座で講師に対して、お礼の言葉を一二回述べた。事前に講師の書物を読んで臨んだこともあったが、大半は、講師の話聞いて、お礼を述べた。講師の話す内容や生き方に感動した場合は、気持ちよ

くお礼の言葉を述べることができたが、講師の意図したことや研究されたことを充分くみ取れない場合は、単調なお礼になったこともあった。いずれにしろ、講話が終わるまで緊張の連続で、中々大変だったことを思い出す。

○次長室の隣に相談部があり、生き生きと活動している所員の姿に接した。エンカウンターをはじめ、教育相談の基礎基本を学んだ。また、卓球の得意な部長さんがいて、ずいぶん鍛えられたことが懐かしい。私個人では、NHKで放映された谷昌恒氏の話が一番心に残っている。「人の心には扉があり、深層部分の内側に扉がある。そこには取手があるため、人の心は分からない。その取手を開けるかどうかは、カウンセラー次第」。共感とか受容とは言うが、もっと本質的・根源的なこととして心に響いている。

○三研の部長さんは植物の大家で、個人的には「カンアオイ」の話が印象に残っている。庭にカンアオイを植えて、一〇年も経つと、それがとんでもない所に芽吹くので不思議に思った。部長さんは、「カンアオイの花は地味で目立たないように地面すれすれに咲く。その花から出す蜜を、蟻がその種子と一緒に食べるから、思わぬ所で根付く」ということだった。カンアオイ一つとっても、今、話題の生物多様性のことに心が広がってくる。

(平成九年四月～一一年三月 次長兼特殊教育部長)

理想の教育センターをめざして

岐阜市教育長 安藤 征治

平成一一年度（一九九九）、私が岐阜県教育センターに在籍したのはわずか一年間である。

この年は、教育センターから総合教育センターに衣替えをするための諸準備、体制づくりを終始した一年であった。服部センター長の強力なリーダーシップのもと、グリーンテクノセンターや情報処理教育センターを統合し、教育委員会事務局の一部としての組織再編であった。

教育研究所が時代の変化に対応してその姿を変えてきたのは、その時々のものであつたと思う。総合教育センターへの再編も又しかりである。「二一世紀を展望した我が国の教育のあり方について」の中央教育審議会の第一次答申をふまえ、「生きる力」と「ゆとり」をキーワードにした新しい学習指導要領が告示されたのは、その前の年であった。そこには、「総合的な学習の時間」の創設や、学校完全週五日制に向けての授業時数削減の方向が示されていた。情報教育や環境教育の重要性が叫ばれ、指導力不足教員や精神疾患で休職する教員の問題から、教師の資質が大きく問われ始めた時期でもあつた。

こうした背景の中で、従来教育センターが重視し研修講座のメインとしてきた教科指導から、教師の人間性や時代

の変化に対応した指導力の育成に重点がシフトしたのも、当然のことであつたと思う。教科に関する力は、免許を持った教員が当然持ち合わせているはずであり、それは自己研鑽によつて身につけていくべき力であるとして、センター講座では、コミュニケーション力の育成、情報リテラシーの向上、児童生徒理解や教育相談の力、人間としての感性を育てること等を意図した講座に変わつていった。

しかしながら私は、教科指導を通しての人間教育を求めべきであるという思いを抱いていた。生徒指導も教育相談も、教科指導の中でこそ機能させることが大切である。今でも思っている。教育センターには、各教科指導のプロがいて、その指導を求めて県内の教師が自主的に寄り集まつてくる。一人の指導主事が一〇人の教師とつながれば、センターと学校現場の数百人の教師がつながる。その人達が教材を開発したり、実践を語り合ったりする場としての教科毎の研究室が、センターには必要であると考えていた。かつての理科棟はその機能を失つていたため、その部屋も使つて各教科の研究室を位置づけた。

今、センターの中に教科毎の研究室が存在し、そこに県内の教員が集い、教科指導について活発な議論がなされているかどうか私は確かめてはいない。そう願いつつ。

（平成一一年四月～一二年三月 次長兼特殊教育部長）

教師の向上心こそ教育改革

海津市教育長 平野 英生

海津市の教育行政に携わって、六年目に入っている。

今年の五月中旬、市内のある中学校を訪問し、美術の授業を参観した。四〇代の女性教師で、わりばしと墨を使って自分のイメージにあった自画像を描く授業であった。一人一人の生徒が、下絵を基に自分の作品のイメージを確認し合った後、教師は、教卓の下からおもむろに師範作品を取り出し提示した。教師が描き上げた自画像を目にした生徒たちは、乗り出すように目を輝かせ、「わあっ」と感嘆の声を上げた。深夜から朝にかけてわりばしペンで描き上げた、気迫あふれる自画像であった。線の強弱が明確にされた凛とした教師の姿が黒板に貼られた。

「生きる力を育てるとは」「教師の指導力をつけるとは」「確かな学力を身につけさせるとは」といった今日的な「教育改革」の課題に応えたすばらしい展開であった。

振り返って私が教育センターに勤務したのは、岐阜県型教育改革の大合唱が唱えられる、まさに二〇世紀末の二カ年であった。岐阜県総合教育センター誕生の直前であり、「内容の改革」「方法の改革」「組織の改革」という教育改革が実施されることになる直前である。

教育センターの生き字引である図書館司書の尾関さんに

当時の研究集録を見せていただいた。そこには、「生きる力をはぐくむ生徒指導」「生きる力をはぐくむ同和教育」などのテーマがあり、「生きる力」を児童生徒にどのような身につけさせるかということが、教育改革の最大の課題であったことを思い出した。生徒指導の研究のまとめには、「生きる力とは」①「生活力」②「共生力」③「耐性力」と定義され、三つの総合した力であると記されている。

先述の美術教師は、三つの総合された力を持つ自立した教諭である。その上にたって、この一時間に生徒に培いたる熱い思いがあった。一枚の自画像には、未来に向け、夢に向け、前進しようとする迫力がみなぎっていた。

「教育改革」という言葉は、いつも使われてきている。真新しいことを進めていくように思えるのだが、究極は、教師の向上心の中からこそ生まれてくるような気がする。

教育センターという研修の場で、多くの人と出会い、多くのことを学ばせていただいた。そのことに心から感謝している今日この頃である。

(昭和六一年四月～平成元年三月 第二研修部専門研修主事)
(平成一〇年四月～一二年三月 第一研修部長)

「SMILE」の思い出

岐阜女子大学教授 安藤 久夫

平成七（一九九五）年七月七日、岐阜県図書館の新改築オープンにあわせて岐阜県生涯学習情報提供システムがスタートした。筆者は平成六年と七年に岐阜県生涯学習センターに在籍してこのシステムの構築に携わった。その時点では Windows 3.1 を搭載した国産パソコンが発売されたばかりで、インターネットも、ごく限られた人たちの間で使われ始めたばかりであった。岐阜県図書館にサーバを置き、県内九九市町村の生涯学習施設にクライアントを配置し、書誌情報、生涯学習情報（学習機会、施設、団体・グループ、指導者、視聴覚教材、資格）を遠隔地から画像も含めて取得できるとともに、県図書館の図書検索や借り出し予約も可能になるといふ、当時としては画期的なシステムができあがった。当時の岐阜県の教育のモットーは「ほほえみと感動のある教育をめざして」であったので、システムの名称をスマイル(SMILE: Super Multilateral Information network for Lifelong Learning and Education) と名付けた。

岐阜県教育センターは平成七年度に情報通信ネットワーク拠点整備の基本設計を、翌八年度に詳細設計を行うとともに情報発信のためのデータ構築を始めた。丁度この頃からインターネットが急速に普及し始めた。平成九年度に、文部省（当時）から「情報通信ネットワーク拠点整備事業」

の指定を受け、サーバ三台、クライアント二七台を中心とするLANを構築し、「SMILE」に接続した。

平成八年一〇月に、県図書館サーバがソフトピアパイン経由でインターネット接続できたので、「SMILE」に接続された端末はインターネットへ接続できるようになった。

岐阜県の情報教育の推進を図るためには、指導できる教員の数を増やさなければならぬとの目的で教員研修事業をスピリット（SPIRIT : Seminars Providing an Internet Round-up in In-service Training）事業の名称で始めた。そのために研修用パソコン三六台を導入し、センターのLANに接続してインターネット研修ができるようにした。それを使って平成一〇年度から「インターネット基礎」、「インターネット活用」、「インターネット特別」、「校長等インターネット」を実施した。受講者の総数は一四二八人で、前年に比べ約一〇倍増になった。これらの研修講座の内容は過去に経験したことのないものであったが、教育センターの全職員で担当し、試行錯誤を繰り返して進めた。当時担当された先生方は今、管理職として活躍されている。

岐阜県の教育の益々の発展を祈念しています。

（平成八年四月～一〇年三月 第二研修部課長補佐）
（平成一〇年四月～一二年三月 第二研修部長）

第三研修部有終の一年

石田 啓介

時代と共に急激な変化が

一九九九年四月、一五年ぶりに岐阜県教育センターへ赴任。この一五年の間に、センター周辺は、建物が建ち並び環境が一変していた。この変化は、周辺の植物にも現れていた。一五年前には、五六科二八二種の植物を認めていたが、一五年後には、五四科二五四種に減少していた。しかも、タカアザミやキクモなど二五科五一種が見られなくなり、代わってブタナやトゲヂシャなどの帰化植物が一七科二三種類加わっての推移であった。

時代の流れの変遷は、私達の生活にも反映されていた。テレホンカードの使用や公衆電話の設置は、携帯電話の普及へと移行し、IT関連の産業が急激に成長していた。

教育課程の改訂に伴い「ゆとり教育」がキーワードとされ、「個性」の尊重や「創造力」の育成に力が入れられるようになっていた。「週休二日制」も学校教育に導入され、経済活動中心に、世の中は新しい局面に移っていた。

新しい方向に向かってレールは敷かれ

教育界も社会の少子・高齢化や国際化の波を受け、税収

の減少に伴い「改革」が進められていた。岐阜県教育センター第三研修部は、教育委員会の「組織再編」の真っ只中。岐阜県総合教育センターの「学校支援課」や「研修管理課」として、「各学校の抱える教育課題の支援、及び、教職員の資質や能力の更なる向上を目指した研修」を担当する組織へとレールは敷かれていた。

振り返ってみれば、昭和三六年、各県に先駆け理科教育センターとして開所。以来、教職員の研修や研究及び児童・生徒の科学教育の一端に関わり、理科教育の振興に寄与できたことは、とても感慨深い。

平成一一年四月から

当時、第三研修部のスタッフは一人、物理、化学、生物、地学の他に、工業や職業、国語や社会の各担当者が加わっていた。主な業務は、各教科科目の研修、六年目研修、幼・小の教員を対象とした野外学習等の各研修担当、科学作品展、及び移動展、夏の夏季講座、科学教育シンポジウムの開催等である。理科科目の研修は、主に、指導要領の改訂に伴う内容を扱う。関連する実験・観察の研究と開発の各成果は、シンポジウム資料や理科研究講座集録としてまとめてきた。六年目研修の生物では、バイオリアクターの製作など通常の教育活動では経験できない内容に取り組む。野外学習では、採集植物を利用した「作品づくり」や

レクリエーションの指導など。どの研修においても、参加者の熱心な取り組みが、印象深く記憶に残っている。

継続される「科学作品展」と「科学の芽」

毎年、九月には県内の児童・生徒の力作揃いの研究成果が、岐阜県科学作品展の「中央展」に集まってくる。総数三五〇点余りにのぼる。この結果は、中央展や移動展で展示公開するとともに、「科学の芽」として冊子にまとめ、県内の各学校や図書館へ配布。また、毎年中央展の中から六名の優秀作品が、岐阜県代表として「日本学生科学賞」に応募。出品された作品は、内閣総理大臣賞、科学技術長官賞、二等賞、三等賞などの入選を果たしている。出品の三分の二が入選するなど、本県の理科教育の水準は、全国的にも高い評価を受け、誇りに感じている。

数々の課題を託し

小・中・高の各学校では、理科好きな児童・生徒の数が学年の進行と共に減少している。「興味・関心を高め、創造力を育む実験・観察」を組み込んだ学習の展開は、理科教育の課題である。また、今日の情報化社会の中で、「情報活用能力」を培うことは、科学技術の発展には欠くことができない。児童・生徒の学習意欲の喚起、及び教職員の自己研鑽の啓発、校種間の連携を図ること等、継続的に解

決を求める課題が続く。岐阜県総合教育センターの益々の充実と発展を期待するばかりである。

(昭和五五年四月～五九年三月 第三研修部研修主事)
(平成一一年四月～一二年三月 第三研修部長)



第53回岐阜県児童生徒科学作品展

(於：岐阜県図書館 平成21年10月31日～11月1日開催)

改革期の相談部

三間 光子

私が相談部でお世話になった二年間は、部課長会でも「三K」。所員研修会においても「三K」。顔をあわせれば、「三K」が口を付くと言っても過言ではない時期でした。「三K」とは、「健康」「感性」「改革」の頭文字を総称したものです。中核は「改革」であり、それに付随したのが、「健康」「感性」であったのかも知れません。なぜなら、改革には多大なエネルギーが必要とされるし、そのための健康を保持しなければならぬ。また、感性も豊かでないと、既存のものを打ち破りにくいからです。ともあれ、それぞれの視点から振り返ってみることにいたしました。

まず、「健康」について。当時、相談部には、県内各地の学校の、児童・生徒、保護者や先生から、さまざま相談が寄せられていました。なかでも深刻であったのは、「いじめ」「不登校」についてでした。これは、「聴く」の二文字が示すとおり、真剣に対応してまいりましたし、場合によっては、学校とも連携を重ねていた実情から、担当者健康が心配される場合がありますが、大過なく乗り切ることができたのは、児童・生徒の立場に立った新しい教育相談を拓こうとする心意気が強かったからだと思われまします。次に、「感性」について。教育相談を志す所員には、豊かな感性が備わっている場合が多いと思われまします。それはカウンセリングの仕方や不登校児童・生徒への対応の現場

に見ることができました。平成一〇年に中央教育審議会は、「新しい時代を拓く心を育てるために」と題した答申を提出しましたが、すでにその頃、答申内容に相応した態度であり、対応がなされていたと思うからです。

最後の「改革」について。「改革は、改善ではない。今までとは違う新しいものを創り出すこと。」ということ、相談部に対しても、新しい教育相談、新しい研修講座が求められ、日夜試行錯誤・苦慮の連続で、各方面からの不安の声に心が痛んだことを憶えています。しかし、結果的には、専門的な知識・資格を有する先生のみならず、そうではない一般の先生方でも、研修によって、児童・生徒・保護者に対する教育相談が可能になる研修講座内容に改革されたことや、遠隔システムを活用した講座や、裾野を拡大するための講座等が提案され、中央教育審議会の答申に沿った「改革」に値する教育相談をスタートさせることができたとあと思っております。さらにまた、「不登校をめぐる諸問題」等の重点講話や、「いじめ・不登校を乗りこえて」等のパワーアッププログラムが、常に盛況であったことを考えると、それだけ完成度の高い魅力ある企画であったのではないかと思われまします。

私自身は、何の力もなく微力な存在ではありましたが、ここで体得した経験や、ここで得た知識を、その後の学校現場で生かすことができ、たいへん貴重な体験だったと感謝いたしております。

(平成一〇年四月～一二年三月 相談部長)

教育の受益者とは誰か

(社) 岐阜県森林公社理事長 渡辺 敬一

今回の記念誌の編纂に当たり、私のような行政職の研修管理課長であった者に依頼があったことに大いなる感懐を抱きました。その訳は、一〇年前の平成一二年度岐阜県総合教育センターが創立された四月一日に私が課長に任ぜられ、初代服部センター長を初め多くの方々と侃侃諤々と「総合教育センターはどうあるべきか」を議論したことがまるで昨日のこのように思い出し、懐かしく思ったからです。

当時の議論の柱は、教員研修、学力向上、IT教育等々といった個々の分野から入るのではなく、児童・生徒にとって教育はどうあるべきか、教育委員会はどうか、義務教育とどう一体化するなど少し大袈裟に言えば、理想、理念から鳥瞰的にアプローチしていました。そして、その原点は、上からの目線ではなく、センターの一翼を担っている学校支援課という名前のおり「支援」というスタイルでありました。

今では、県財政の厳しさ等から縮小されていますが、能力開化支援事業（子供でなく人格を意識した児童・生徒の個々の能力を開化させる事業）は総合教育センターのシンボリックなプロジェクトでした。この試みは、社会に出て

真に自分の能力、センスに合った「生きる力」を身につけるために、殆どのジャンルの職業のプロフェッショナルの先達の全国の方々に登録してもらい、県内の私学も含めて要請すれば、講師費用は県が負担するという画期的なものでした。講師の中には、民間企業の経営者、チェコのバイオリン奏者、著名な女性漫画家、演劇家など多士済々でした。当初、「教員に教える力が不足しているから実施するか。」と一部では否定的な評価はありましたが、「職業に必要な能力をどのように身につけるか」ということについて、その道のプロの人の直接の授業は有益であること、また決してプログラムとして学校に押しつけなかったこと等により、誤解も氷解していきました。

次にIT教育も大きなテーマでしたが、LANの整備とパソコンの配備については、知事部局、県議会と大いなる議論がありました。とりわけ、パソコンの配備については、大議論となり、私と渡邊泰治課長補佐がアメリカ合衆国を調査し、生徒がいつでもパソコンを利用できるように、一人一パソコンでなく、いつでも誰もが利用できる図書館などに重点配備すること、そしてスキルの向上等ソフトに重点を置くことで決着しました。そして今日この分野では日本のおトツプクラスにあります。

必ずしもうまく定着しなかったものとしては、紆余曲折の中でモデル的に製作した著名予備校の名物教師のビデオ

授業です。本来の目的が十分認識されず本格的展開に至らなかつたことの背景にはこのプロジェクトが教育の外部からの提言であり、県教育委員会の中で十分なコンセンサスがなかつたことも一因です。

最後に、ゆとり教育も政治の中で翻弄され漂流してしまいました。このようなときこそ総合教育センターの実践の成果を全国にさらに情報発信し、揺るぎない教育の確立に資することを期待しています。とりわけ、当時行政職との間を円滑に総合調整していただいた、現在の小林義務教育総括監及び水野センター長の御二人は、県教育委員会の現職幹部ですので、そのリーダーシップのもと、岐阜県教育が、益々充実していくことを切望しています。

(平成一二年四月～一四年三月 研修管理課長)



「情報教育関連講座」の研修風景

「能力開花支援事業」に携わって

戸本 敏昭

三八年間の教職人生のうち県教育委員会で一五年間、色々な分野で仕事をさせていただいた。三つの教育事務所に七年、学校指導課に七年、教育センターに一年、平穏な時はない。いつの時代にも課題が山積しているものである。教育センターは、学校指導課時代から教職員の資質向上についての連携を図ってきたところであり、教育センターで行われる研修の内容や方法などに直接関わることができたことは大変有意義であった。

私は、各務所長のもと次長として僅か一年だけであったが、特に心に残っている事は、研修事業の見直しであった。それは、教育センターで行う研修事業の一部を我々職員が外へ出て行う型の研修が出来ないかを検討し、何とか実現するところまでこぎ付けたことである。

その後、教育事務所と学校の四年間を経て平成一三年三月に退職して現在一一年目である。

私事で恐縮であるが、退職したら家内のヴァイオリンと私のファゴット、オーボエ、クラリネット、サクソフォン、フルートなど五種類の木管楽器、それにピアノ伴奏者の協力を得て県内の幼稚園や学校、病院、福祉施設など演奏活動をする計画であった。

三月に退職して暫くして、県教委の新規事業「能力開花支援授業」が始まったことを知ると同時にその講師のお誘いをいただいた。

ご存知のように、登録された様々な分野の講師が幼稚園

・小・中・高、特別支援学校など、学校の要請に基づいて学校に派遣されるというものである。

私たち三名で編成する「リングトリオアンサンブル」の演奏は、ヴァイオリンに五種類の木管楽器を順に組み合わせるという多様なアンサンブルの面白さを見て・聴いて楽しめるといのが特色である。私の場合は、その他にも、合唱・器楽指導などにも要請があり、結構忙しい。

当時、この事業を立ち上げるまでの担当者のご苦労は多かったことと思いますが、幼稚園や小・中学校での演奏活動を通じて児童・生徒や学校の先生方の喜びの反応を見聞きするに付け、講師としての喜びも大きいものである。

全校一四名、一八名のへき地校、卒業を一週間後にひかえた六年生の最後の音楽鑑賞会、創立一三〇周年記念行事での演奏など、演奏の数だけの出逢いと感動がある。

学校関係以外では、病院や福祉施設、県美術館、県民ふれあい会館、公民館、喫茶・ギャラリ、企業の行事など演奏行動範囲が広がっている。

平成一六年には思いがけなく、全国連合小学校校長会「小学校時報」の特別企画「先輩校長の活躍に学ぶ―退職後の人生―」で原稿依頼を受け、他県に誇る「能力開発支援事業」について触れさせていただいた。

三年ごとの見直しで、当初と比べると運用の仕方が随分改善されてきたように思う。しかし現在では、予算等の関係で大幅に縮小されてしまい残念であるが、これも時代の流れかと思いつつ、現在もこの事業に携わっていただけることに深く感謝したい。

(平成九年四月～一〇年三月 次長兼特殊教育部長)